

令和4年度かつの市未来アカデミー・武蔵野大学発展FS 「鹿角市中心市街地の未来を描く」報告書

武蔵野大学法学部政治学科3年 佐藤昂輝

3年 齊藤光祐

2年 田村康祐

武蔵野大学経済学部経済学科3年 高橋佳希

武蔵野大学経営学部経営学科4年 川内理奈

3年 榎本 耀

武蔵野大学人間科学部社会福祉学科3年 安江里花子

経営学部経営学科教授 小暮真人

(はじめに)

全国各地で人口減少が大きなテーマとなっている。地方創生は東京への人口と経済力の一極集中を是正することを目的にした国策であるが、「日本創成会議」が消滅可能都市を公表したこともあり、全国の地方公共団体が地方創生に積極的に取り組む機運が高まっている。具体的には、各市町村が人口減少を抑えるために地方にしごとをつくり、安心して働けるようにすること、地方への新しいひとの流れをつくるものである。そして、多くの市町村が移住支援に乗り出しているのであるが、そもそも日本全体の人口が減少していることを考えると、移住支援は市町村間のカニバリズムにもなりかねない。

ところで1970年代から地方の時代が提唱され、各地方公共団体は独自に地域活性化に取り組んできた。例えば、大分県の一村一品運動、神戸市の臨海開発、新潟県や長野県などのスキー場開発、高知市のよさこい祭りなど様々である。この地方から始まった地域活性化は、地域資源を活用し、まずは地域の人たちが幸せになり、その余剰を地域外に供給するという内発的発展でもある。これらの先駆的な取り組みは、人口の奪い合いではなく、自分たちの地域の特徴・魅力を発信し、多様な地域が共存する仕組みを模索した点で、現在の地方創生とは異なっている。

今回の共同研究は、鹿角市の中高生が就職や進学で鹿角を離れても、いつか鹿角市に戻ることができるための課題について対話を深めることを目的に行った。それは未来からの留学生である鹿角市の中学生、高校生と鹿角市を知らない大学生がどんな鹿角市の未来を描き、今、足りないもの、それをどう補ったら良いかを一緒に考えるという試みである。

地域で育った子供たちは、よほどのことがなければ、育った地域のことを嫌いになることはない。地域を離れるのは、大学、仕事、遊び場がないからであり、鹿角にいても大学で学べ、東京と同じように働け、遊ぶことができれば、鹿角を拠点に選ぶ人が増えるかもしれない。そんな願いを込めた研究である。

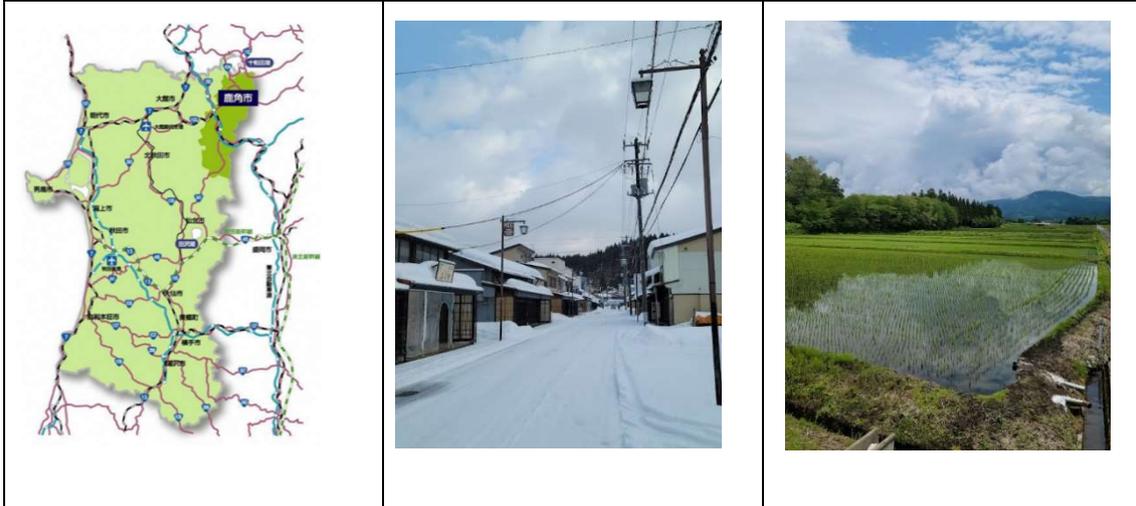
目次

1. 鹿角市の概要
 - 1.1 鹿角市の特徴・魅力（田村康祐）
 - 1.2 鹿角市が抱える課題（高橋佳希）
2. 鹿角市の中心市街地
 - 2.1 鹿角市の中心市街地の考え方（安江里花子）
 - 2.2 これまでの取り組みと課題（榎本耀）
3. 今回の共同研究の概要（佐藤昂輝）
4. 共同研究の成果（川内里奈）
5. まとめ（齊藤光祐）

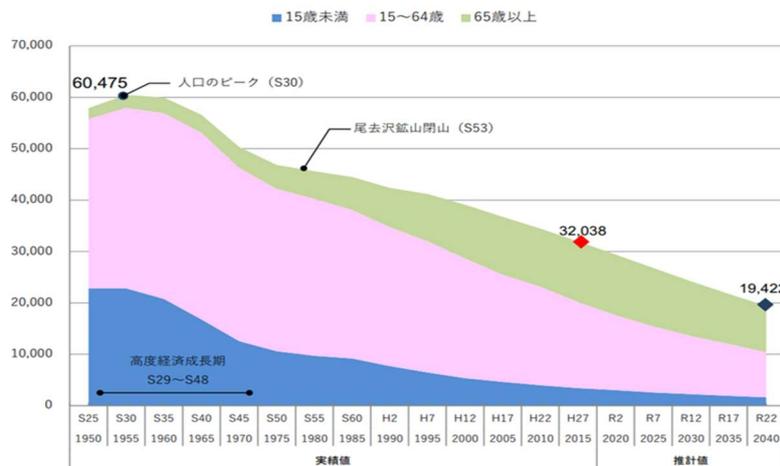
1. 鹿角市の概要

1.1 鹿角市特徴・魅力

秋田県最北東部に位置する自治体、鹿角市。北東北 3 県のほぼ中央に位置し、北は青森県や東は岩手県に接し、大館市などとも接する。



米代川に沿って国道 282 号、JR 花輪線、東北自動車道が通っており、市内には鹿角八幡平、十和田の 2 つのインターチェンジがある。盛岡市、青森市、八戸市など主要都市と 1 時間圏内で結ばれているだけでなく、首都圏とも直結している。市域は東西 20.1 km、南北 52.3 km と南北に長く、総面積は 707.52 km² で全国の市町村中 99 番目に広い。年平均気温は約 10℃、降水量は年間約 1500 mm、積雪は平地で 80 cm、降雪は 12 月から 3 月末まで続く。



資料 総務省「国勢調査」
国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口（平成 30（2018）年推計）」

鹿角市の人口は 29,088(r4)であり、60,475 人(s30)をピークに減少の一途をた

どっている。同市政策企画課総合戦略室の海沼氏によると、これはかつて、日本屈指の金や銅の産出量を誇る尾去沢鉱山での労働者が多く居住していたが、同山の閉山によって人口減少が進んだことが理由とのことである。かつては鉱山が主要な産業であり、そこで働く人達によって町が賑わっていたことが想像できる。

鹿角市は市域の8割が山野、河川などで、十和田湖、大湯川、八幡平、ドラゴンアイ、湯瀬溪谷など豊かな自然に恵まれている。最も高い山は岩手との県境にある中岳 1024mで、多くは 1000m に満たない低山であることから人々も自然と共生してきた。自然からの恵みは、姫竹、山菜、キノコ、栗などがあり、熊、猪、鹿など野生動物も多く生息する。こうした自然環境を生かして、現在は、牛や豚などの畜産、りんごや桃、大根、米などの農業が主要産業となっている。

また、インタビューで訪れた事業者の方の話によると、職人技がひかる町工場など数多くの魅力あふれる中小企業があるという。確かに 2020 年工業統計調査をみると工場数は 60 と多くはないが、業種別の特化係数をみると、事業所数や従業者数よりも付加価値額が高くなっており、生産性の高い工場が多い。このことを踏まえると、農業や畜産などの第一次産業だけではなく、製造、加工などの第二次産業も地域産業として機能していることが想像できる。

	事業所数			従業者数			特化係数（県内）					特化係数（全国）				
	鹿角市	秋田県	全国	鹿角市	秋田県	全国	事業所数	従業者数	現金給与額	製造出荷額等	付加価値額	事業所数	従業者数	現金給与額	製造出荷額等	付加価値額
食料品	16	302	23,542	387	7,957	1,132,189	1.5	1.9	4.3	6.5	5.6	2.1	1.6	9.7	6.2	4.2
繊維	7	243	10,562	210	5,947	238,748	0.8	1.4	2.1	2.3	2.5	2.0	4.2	2.0	5.7	5.7
窯業・土石	5	87	8,998	43	1,575	236,690	1.6	1.1	1.8	1.4	2.1	1.7	0.9	3.1	1.6	1.6
電子部品・デバイス	5	94	3,772	201	12,739	409,489	1.5	0.6	0.8	0.5	0.6	4.0	2.4	6.0	3.1	3.6
電気機械	5	48	8,279	202	2,060	501,346	2.9	3.8	7.1	7.8	9.4	1.8	1.9	7.1	3.1	3.6
家具・装備品	3	38	4,557	30	800	88,798	2.2	1.4	2.4	2.4	3.3	2.0	1.6	1.0	3.0	3.8
木材・木製品	2	115	4,600	14	2,395	87,281	0.5	0.2	非公表	非公表	非公表	1.3	0.8	非公表	非公表	非公表

このほか、鹿角市は多くの世界遺産があるのも特徴だ。「北海道・北東北縄文遺跡群」として世界文化遺産に登録されている大湯環状列石や、ユネスコ無形文化遺産であり、国重要無形民俗文化財の大日堂舞楽、花輪ばやしがある。このほかにも毛馬内盆踊り(国重要無形民俗文化財)や大湯大太鼓(県民俗文化財)などの祭り文化がある。



人口減少が急速に進んでいるが、地元の人によると、祭りの時期になると進学や就職で鹿角を離れた方も多く戻り、祭りに参加しているという。鹿角に戻ってまで祭りに参加するということは、鹿角で生まれ、育った人たちにとって、次の世代に継承する価値があるということの証左ではないだろうか。

つまり、鹿角市は人口減少という大きな問題に直面する一方で、交通アクセスの利便性や魅力あふれる産業、そして文化的価値を有する祭りといった様々な良さをもつ自治体である。

参考文献

「秋田県鹿角市 2021 年市勢要覧」

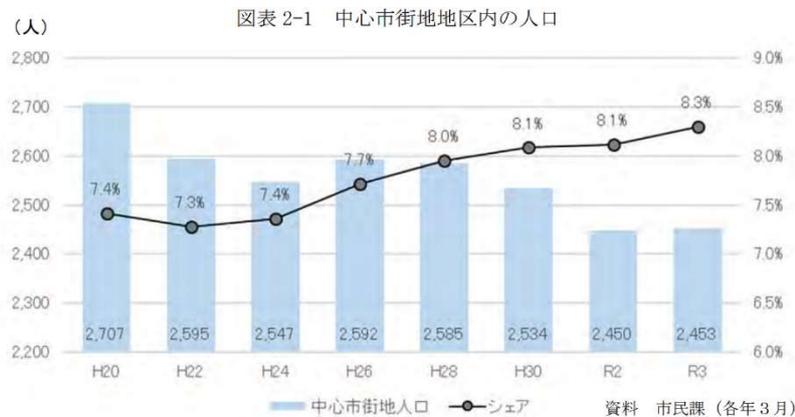
「受け継がれてきた、人と人の想い。社員の家庭を第一に考える会社」スコップ

<https://scoop-scoop.jp/recruit/joytam> 参照 2022 年 8 月 22 日

1.2 鹿角市の課題

(人口減少)

中心市街地の人口は、市全体と同様に減少傾向にある。実際に1週間住んでみてどこも賑わっている様子はなく、人通りが全然ないのが鹿角市の最初の第一印象だった。だが十和田八幡平駅伝競走全国大会ボランティアや花輪ねぷたに参加したところ多くの人で賑わっており、花輪ねぷたでは歩きづらいと感じるぐらい多くの人に参加していた。その人たちは一体どこからきたのかと疑問になるくらいである。



(ふるさと意識・回帰)

鹿角市を進学や就職で離れた若者が戻ってくることが少ないという現状に対して、あきらめている市民が多いこと、あるいは鹿角市の様々な良さに興味を持っている市民が少ないことが課題でなないだろうか。

例えば、大学卒業後、鹿角に戻ってくるのを条件とした奨学金制度があれば、鹿角にもどるための直接的なインセンティブになる。さらに、いま鹿角市に住んでいる大人たちが子供たちに、鹿角で暮らすことについて夢と希望を持たせることができなければならない。例えば、鹿角の歴史・文化に誇りをもてるような市民講座、趣味や交流のコミュニティ事業を充実することによって、日ごろから大人も鹿角の歴史・文化を学び続け、さらに自分や地域の子供や若者に鹿角の魅力を伝えることができるようになっていくことが大切であると考えている。

(空き店舗)

商業環境には厳しいものがある。小売業の事業所数は、平成 28 年は平成 14 年と比較し約 4 割減少し 301 事業所、従業者数も 26.6%減少し 1,837 人となっている。これを裏付けるように、商店街の空き店舗数は新規出店もあるものの廃業も多く増加傾向にある。その空き店舗を利用した取り組みを積極的に行っていけば若者も帰ってくると思う。具体的には、鹿角市を離れた若者は仕事の選択肢が少ないことで戻ってこない。そこで空き店舗を利用し高校生などを対象にした起業のメリットやノウハウを教わる場を増やしたり、鹿角に新しくオフィスを設置することを支援する制度を作ることである。鹿角市の地域特性を活かした個性的なビジネスを起業しやすい環境をつくり、実際に起業が増えることで、多くの若者に帰ってきてもらえると思う。

図表 2-11 空き店舗数の推移

(件)

	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
大町	9	10	11	12	17	16	14	15	17	17	18	18
新町	2	3	3	4	5	5	5	6	5	5	8	7
谷地田	8	8	7	6	2	2	4	3	3	3	3	4
花通り	4	5	5	7	9	10	9	10	11	9	11	21
合計	23	26	26	29	33	33	32	34	36	34	40	50

資料 産業活力課 (商店街実態調査、各年 9 月末)

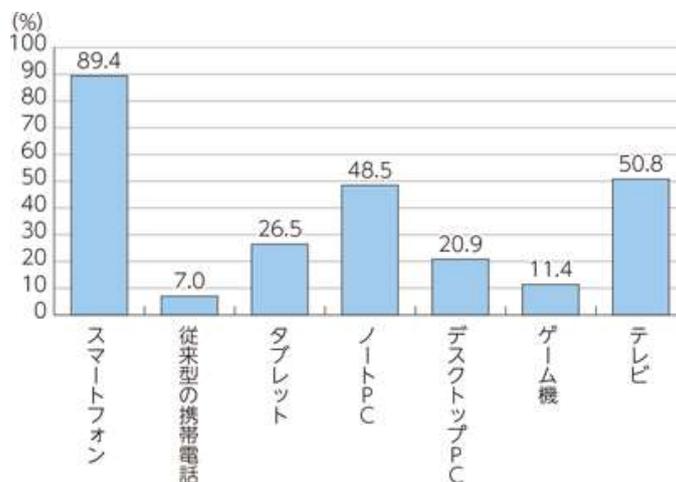
(情報発信)

鹿角市には、風光明媚な自然とともに、国指定の重要無形文化財である「毛馬内の盆踊り」、「大日堂舞楽」、「花輪祭の屋台行事(花輪ばやし)」があり、そのうち「大日堂舞楽」、「花輪ばやし」はユネスコの無形文化遺産にも登録されている。ほかにも幻想的な「花輪ねぷた」、勇壮な「大湯大太鼓」など様々な民俗文化が残されている。だが、私もそうだったが知っている人はあまりおらず、知人に聞いても知らないのが現実ではないだろうか。デジタル機器の活用が進んでいることを踏まえると、より多くの人に知ってもらい、観光客を呼ぶためには SNS を上手く活用していく必要がある。インタビュー先でも SNS を使用しているが更新はしていないという声が多くあった。それでは知ってもらうきっかけを狭めているので、毎日、鹿角の情報を更新することが重要である。さらに、情報発信

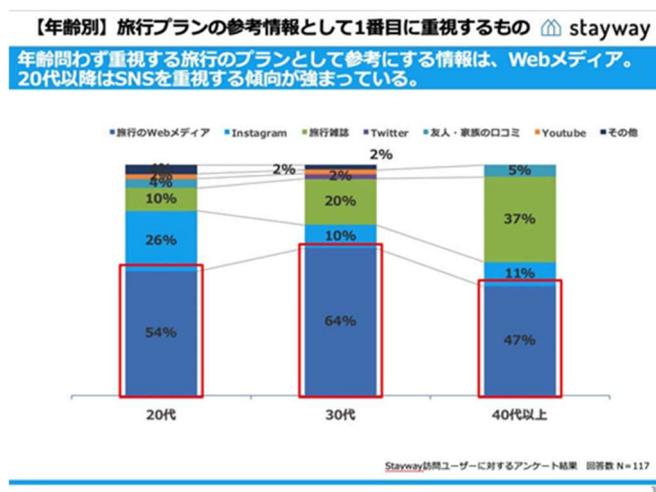
力のある芸能人等との連携も図りたい。

令和3年版デジタル利用環境・サービス等の活用状況（総務省）

観光経済新デジタル版（2019年9月15日）



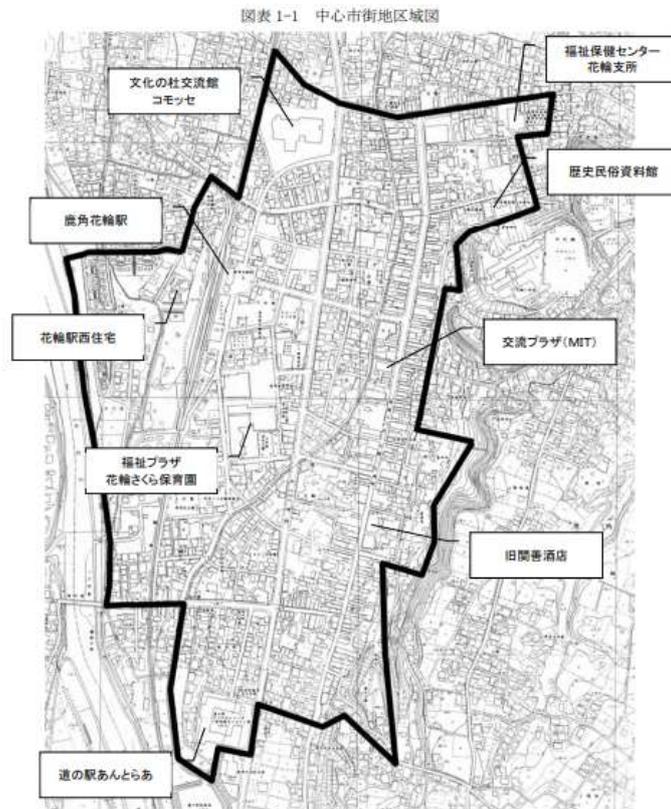
「聞旅行情報の収集方法と宿泊予約の意思決定の年代別調査」



2. 鹿角市の中心市街地

鹿角市の中心市街地は下図のとおりである。4つの商店街が形成されている商業地域を中心とし、福祉保健センターやコモッセなどの公共施設、交通拠点の鹿角花輪駅や道の駅あんたらあ、金融機関や病院等の都市機能が集積している区域、及び市民生活に重要な都市機能と歴史・文化施設を中心とする観光機能を

組み合わせた約 0.27 km²の面積になる。



2.1 鹿角市の中心市街地の考え方

鹿角市の中心市街地の考え方についてまとめたうえで、中心市街地に対する私の考えも合わせて述べていきたい。

まず、鹿角市では「中心市街地は「まちの顔」であり、都市機能や経済発展として大きな役割を果たしている」（鹿角市中心市街地活性化プラン）としている。しかし、時代の変化や社会の多様化に伴い、中心市街地の役割は減少している。このような状況に対して、鹿角市は平成 21 年 3 月にまちづくりビジョンを策定し、中心市街地の位置づけや、その対象区域について定めた。さらに、平成 22 年 3 月、中心市街地活性化プランを策定し、中心市街地に賑わいを取り戻すためのさまざまな取り組みを掲げ、実施している。

次に、この鹿角市の中心市街地への考え方に対して、私自身の考えを述べたい。

中心市街地という括りによって、中心市街地と中心市街地外との間で、格差がさらに広がるのではないかと考えている。私たちが生活し、調査等を行った場所は中心市街地内であり、中心市街地外について知る機会がなかった。これは、武

蔵野大学のプログラム自体が中心市街地に焦点を当てており、短い期間の中で、鹿角市全体の強みや資源について実地調査するのは難しく、中心市街地内に焦点を当てることはやむを得ないかもしれない。しかし、中心市街地外にも焦点を広げなければ、本来、鹿角市が持つ強みや資源が見えなくなる。私は、鹿角市は中心市街地だけでなく鹿角市全体が「まちの顔」であると思う。なぜなら、市全体の魅力や活力は計り知れないものであり、中心市街地だけとは到底言い切れないからだ。報告会で「まずは（かづのを）知ってもらうことが前提にある」との意見を地域住民の方から頂戴したことからこの考えに確信をもった。この声を踏まえ、私は中心市街地と中心市街地外という線引きをなくし、“鹿角市”を知る機会を増やしていくことが求められているのだと考える。

武蔵野大学では、「世界の幸せをカタチにする」というブランドステートメントを掲げている。「世界の幸せをカタチにする」ためには、「場所に関係なく、誰もが幸せを感じられるような環境づくり」が必要だ。今回のプログラム名を踏まえると、大学の掲げるブランドステートメントを達成できたといえるのだろうか。答えは明らかだろう。今後、中心市街地内外に限らず、鹿角市全体の幸せがカタチになるよう、切に願う。

参考文献

・秋田県鹿角市「鹿角市中心市街地活性化プラン」(令和4年3月) 最終閲覧日
2022年8月22日

<https://www.city.kazuno.akita.jp/material/files/group/4/21918download.pdf>

・秋田県鹿角市「鹿角市まちづくりビジョン」(平成21年3月) 最終閲覧日
2022年8月22日

<https://www.city.kazuno.akita.jp/material/files/group/4/21918download.pdf>

2.2 これまでの中心市街地活性化の取り組みと課題

鹿角市が定めた中心市街地活性化プランでは「多世代が安心して暮らせる街」、「人が行き交う訪れたくなる街」の二つを基本方針として掲げ、中心市街地に人の流れを作る取り組みを進めてきた。

まず、1点目は中心市街地の定住人口を増やすため取り組みである。まちなか

居住の促進として花輪駅の西側にある公営住宅建設事業や空き家を有効活用した定住支援策を講じている。

2点目は、商業・業務機能の維持・誘導である。既存店舗の魅力向上を図る際の補助制度、起業・創業等の支援策などにより、小売業だけでなく、サービス業、情報関連産業も含めて立地を促進している。

3点目は、地域資源を生かした来街機会創出である。学習文化交流施設（コモッセ）、福祉プラザなど中心市街地に交流拠点を整備し、観光資源や郷土の歴史・文化を生かした事業、イベントの開催などによって来街者を増やす取り組みを進めている。

そして、4点目は交通環境の改善や賑わいづくりである。交通面での利便性や回遊性の向上のため、循環バスの運行を軸に中心市街地へのアクセス向上、人の往来を活発化させ、活気に溢れたまちづくりを進めている。また道の駅「あんとらあ」などといった市外からの観光客向け施設や、まちなかオフィスといった地元で仕事ができる施設づくりも行なっている。

以上、中心市街地対策を進めてきたが、依然として次の課題がある。

- ① 人口、小売業の事業所数、従業者数ともに減少傾向にあること
- ② このことから空き家や空き店舗が増加していること
- ③ 空き家や空き店舗の増加は、地価を下落させること
- ④ さらに空き家や空き店舗が増えると賑わいの喪失とともに安心・安全の問題を抱えていること
- ⑤ また、人口や従業者数が減少することで、市内のバス路線利用者数も減少していること

いずれにしても、中心市街地には多くの観光資源が分布し、さらに公共施設を集約してきたにもかかわらず、活気がなくなってきたのは、中心市街地の都市機能、観光資源が十分に活用されていない可能性がある。

3. 共同研究の概要

3.1 経緯・意図

今回の共同研究は、2020年に鹿角市と武蔵野大学が包括連携協定を締結した

ことから構想し、第一弾として2021年8月にオンラインで鹿角市の中高生と学生と鹿角の未来を考えるワークショップを実施した。その結果、鹿角市で学び続ける、働き続ける、住み続けるための課題が見えた。つまり、大学がない、働きたい仕事がない、遊ぶ場所がないので鹿角を離れざるを得ないということである。

しかし、鹿角市はコンパクトシティづくりに取り組んでいる。住民が必要とする様々な機能を中心市街地に集約し、都市の利便性を高めようというものである。これは中高生にとって明るい未来につながるのではないかとこの観点から今年度のプログラムを実施した。

人口及び事業所を短期的に増やすことはできないが、現在、鹿角市に住んでいる人、仕事をしている人たちの中心市街地への思いの中に鹿角市の将来につながるキーワードが隠されているのではないかとこの仮説を設定し、インタビュー調査を行った。

さらにインタビューで抽出された様々なキーワードを踏まえ、大学生と中高生との対話により、鹿角市の地域資源をもっと有効活用していくこと、情報発信の重要性などの取り組みを提案した。

3.2 共同研究の概要

(1) 日程

① 事前学修

8月3日（水）及び4日（木）両日、2限目、3限目に実施。教室は有明キャンパス1号館9階906教室。

② 鹿角市プログラム

8月6日(土)～13日(土)7泊8日、詳細は下表のとおり。教室は鹿角市
まちなかオフィス。

月日	時間	活動内容	参加者
8月6日(土)	午前中	移動	
	15時	鹿角市挨拶 中心市街地見学	学生、教員、事務方
8月7日(日)	10時～12時 13時～16時 18時～	駅伝ボランティア 中心市街地見学 七夕まつり	学生、教員
8月8日(月)	10時～12時	中心市街地講義 鹿角市講義 チームづくり	学生、中高生
	13時～16時	問いづくり、インタ ビュー練習	学生、中高生
8月9日(火)	9時～12時	インタビュー	学生、中学生
	13時～16時	インタビュー	学生、中高生
8月10日(水)	9時～12時	インタビュー	学生、中高生
	13時～16時	インタビュー	学生、中高生
8月11日(木)	9時～12時	まとめ	学生、中高生
	13時～16時	セッションの問い づくり	学生、中高生
8月12日(金)	9時～12時	セッション準備	学生、中高生
※FS合流	13時～16時	セッション 発表	学生、中高生
8月13日(土)	9時～12時	鹿角市報告・挨拶	学生、教員、事務方
	13時～	移動	

③事後学修

8月25日(木)及び26日(金)両日、2限目、3限目に実施。教室は有明キ
ャンパス1号館11階11A教室

(2) 参加者

① 鹿角市

齊藤 彩乃 サイトウ アヤノ 県立花輪高校3年
工藤 葉奈 クドウ カナ 県立花輪高校2年
戸舘 果実 トダテ コミ 市立八幡平中学校3年
海沼 実羽 カイヌ ミウ 市立八幡平中学校2年
成田 裕帆 ナタ ユキ 市立十和田中学校1年

② 武蔵野大学

川内理奈 カノウチリナ 経営学科4年
齊藤光祐 サイトウコウスケ 政治学科3年

佐藤昂輝 サトウコウキ 政治学科 3年
 高橋佳希 タカハシヨシキ 経済学科 3年
 榎本 燿 エノモト ヒカル 経営学科 3年
 安江里花子 ヤスエリカコ 社会福祉学科 3年
 田村康祐 タムラコウスケ 政治学科 2年

(3) インタビュー先一覧

日時	A班	B班	C班	D班	
8/9 (火)	10:00 ～ 10:30	かつの商工会 地域産業の発展に向け、中小企業の相談や経営サポートなどを実施 住所：花輪字下花輪 14-1 電話：0186-22-0050 対応者：高木和昭事務局長ほか 分野：商工業	NPO 関善賑わい屋敷 国登録有形文化財「旧関善酒店主屋」の保存と活用を担う 住所：花輪字上花輪 85 電話：0186-23-7799 対応者：大森好一理事長ほか 分野：観光業（地域資源）	KAT'S BURGER Uターン者が中心市街地にオープンさせた鹿角市初のハンバーガー専門店 住所：花輪字上花輪 85-11 電話：0186-22-4043 対応者：高橋勝美オーナーシェフ 分野：観光業（飲食サービス）	文化の社交館コムッセ 中心市街地の拠点施設。まちなかの賑わい創出を図る役割を担う 住所：花輪字八正寺 13 電話：0186-30-0293 対応者：成田小百合館長 分野：行政
	11:00 ～ 11:30	(株)ファストコム鹿角オフィス IT 関連の誘致企業であり、映像作成や WEB メディアなどを手掛ける 住所：花輪字下花輪 33-1 電話：0186-22-6071 対応者：柳澤嵩志オフィスマネージャー 分野：商工業（情報通信）	花輪ふくし会「かみはなわ」 住み慣れた地域で訪問、通所、短期滞在の3種類の介護サービスを実施 住所：花輪字上花輪 139-1 電話：0186-22-4082 対応者：管理者 奈良佳仁氏 分野：健康・福祉	千歳盛酒造(株) 明治5年創業の蔵元。全国新酒鑑評会では「千歳盛」が金賞を受賞 住所：花輪字中花輪 29 電話：0186-23-2053 対応者：製造部門 児玉和幸氏 分野：商工業（小売）	鹿角市歴史民俗資料館 大正5年旧鹿角郡公会堂として建築。市が資料館として保存・活用 住所：花輪字中花輪 113 電話：0186-22-7288 対応者：藤井安正館長 分野：観光業（地域資源）
	昼休憩				
	14:00 ～ 14:30	感動鹿角パークホテル まちの中心地に位置し、コンベンション機能を持つビジネス・観光拠点ホテル 住所：花輪字塚向 30-1 電話：0186-22-1189 対応者：黒沢忠道総支配人ほか 分野：観光業（宿泊）	Salon de 割烹 美ふじ 鹿角市発祥の「きりたんぼ」や古代米・秋田路を使った伝統料理を提供 住所：花輪字下花輪 155 電話：0186-23-5771 対応者：加藤照子女将 分野：観光業（飲食サービス）	(株)タカヤ 眼鏡、モバイル、飲食業など幅広く事業を展開。働き方改革にも取り組む 住所：花輪字八正寺 1-2 電話：0186-30-0123 対応者：高谷秀和代表取締役社長 分野：商工業（小売）	cafe SAKUYA 鹿角初のオーダー式自家焙煎珈琲店。ふるさと納税サイトにも出品 住所：花輪字八正寺 19-1 電話：0186-27-9106 対応者：柴田佳一代表 分野：観光業（飲食サービス）
8/10 (水)	10:00 ～ 10:30	鹿角市福祉プラザ 子育て支援、高齢者支援、障がい者支援を一体的・総合的に実施 住所：花輪字上中島 93 電話：0186-30-0557 対応者：児玉晃事務局長 分野：健康・福祉	鹿角花輪駅前観光案内所 まちの案内人が常駐し、本市を訪れた観光客に鹿角の魅力を発信 住所：花輪字下中島 144 電話：0186-22-0108 対応者：DMO推進室 菅原由紀子 分野：観光業	鹿角コミュニティ FM(株) 地域密着型メディアとして行政、観光、生活等のきめ細かな情報を提供 住所：花輪字下中島 12-2 電話：0186-25-8739 対応者：安保朗代表取締役 分野：商工業（情報通信）	セキワ土地建物 鹿角市宅地・建物データバンクの協定を締結し、移住者用物件を提供 住所：花輪字上中島 54 電話：0186-23-8825 対応者：石坂和彦代表 分野：不動産業
	11:00 ～ 11:30	ダイマル呉服店 大町商店街に店舗を構え、衣料品を販売。祭り用の浴衣や雪駄も扱う 住所：花輪字中花輪 18-2 電話：0186-23-3436 対応者：渡部嘉代子氏、渡部律子氏 分野：商工業（小売）	(有)石木田文具店 大町商店街に店舗を構え、雑貨、文具、学用品、事務用品などを販売 住所：花輪字中花輪 134 電話：0186-22-2048 対応者：石木田幸一郎氏 分野：商工業（小売）	ハミングカード協同組合 市内最大の加盟店数を持ち、電子マネー「キラハミング PAY」を導入 住所：花輪字中花輪 14 電話：0186-30-1123 対応者：星川由則理事長 分野：商工業	(株)関小市商店 大町商店街にある昭和8年創業の酒販店。県内約30歳を取り扱う 住所：花輪字中花輪 132 電話：0186-22-1255 対応者：佐藤景子店主（明酒師） 分野：商工業（小売）
	昼休憩				
	14:00 ～ 14:30	予備	予備	予備	予備

3.3 ワークショップを体験して

今回の FS では、鹿角市に住んでいる中高生とグループを組み活動した。大学生だけで考えるのではなく中高生と共に鹿角市の未来を考えることで、実際に鹿角市で暮らしている若者の意見を取り入れられるという点がある。現在、鹿角市の若者の人口は右肩下がり、特に鹿角市から東京などへ出て、そのまま鹿角市に帰ってこない人が多い。

そういった現状から、「どうすれば若者が鹿角市に帰ってきてくれるか」、「鹿角市に残ってくれるか」についてインタビューを元に考えた。しかし、それだけでなく、これからその選択をする中学生、高校生と考えることで、より必要な要素を見つけることが出来る。また、鹿角市から出ていきたいと考えていた中高生の考えが、今回の活動を通して変わるかもしれないということも大事な点となっている。

大学生だけで活動し、良い案を作成しそれが実際に政策として使われても、若者が鹿角市に残るかと言われるとそうとは言い難い。一人一人が当事者意識を持ち、地元を良くしていきたいという気持ちを持つことで、進学や就職で鹿角を離れても将来は戻ってくる人、そのまま鹿角に残ってくれる人が増える可能性がある。今回の活動では中高生も主体的に活動し、鹿角市の発展について積極的に発言していたため、地域への帰属意識は高まったのではないだろうか。

今回の発展 FS は、鹿角市の中心市街地の活性化が目的である。

まず、この目的を達成するためのアプローチとして、現地の中高生と共に 4 つのグループに分かれて、鹿角市で暮らし、働いている方たちに対して良いところ（ハイポイント）を話してもらうための「問い」を作成し、インタビューを行った。

インタビューを実施した後、得られた回答の中で特に多く出てきたワードや自分たちが気になった単語、「未来」に関するキーワードを各グループでまとめ、全体で共有した。

さらに、新しく 3 つのグループを作り、インタビューから得られたキーワードをもとに「20 年後の鹿角市がどうなっているか」という将来像を描き、その未来のために今何が足りていないか、課題整理を行った。いわゆるバックキャストイングである。

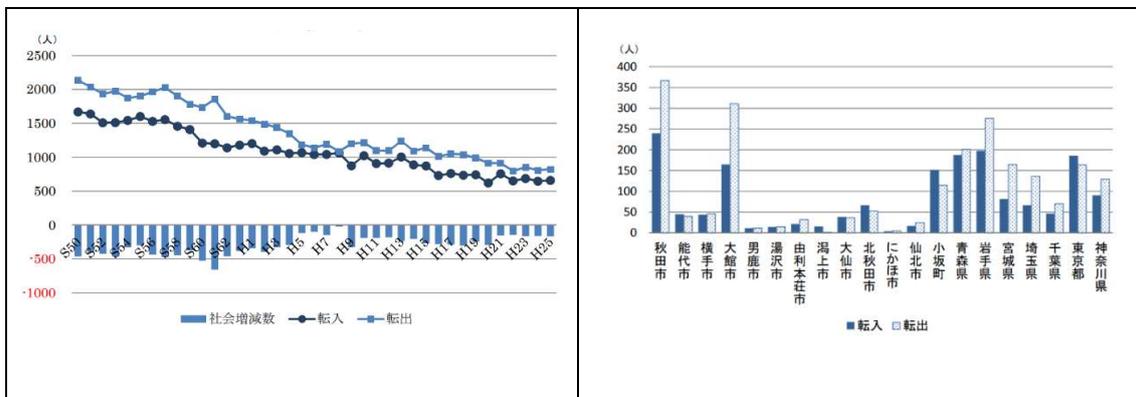
そして、3つのグループそれぞれが今後の政策形成の参考となるような活性化案を作成し、鹿角市で暮らす方々へ成果の報告を行ったものである。

4. 共同研究の成果



A 班「おかえりが響くまち」

インタビューから中心市街地が昔は賑わっていた様子が分かる。また、高校を卒業して東京を始めとした首都圏、県内の他都市、仙台、岩手、青森などに就職や進学することは鹿角市の発展のために必要と考える人が多い。東京で服飾関係の仕事をしていたが、家業を継ぐために戻った「きりたんぼ鍋」を提供する飲食店のお姉さんもいた。実際に、データを見ると、社会増減の転出数と転入数の差は縮小しつつあり、特徴的なのは東京からの転入数は東京への転出数よりも多いことである。



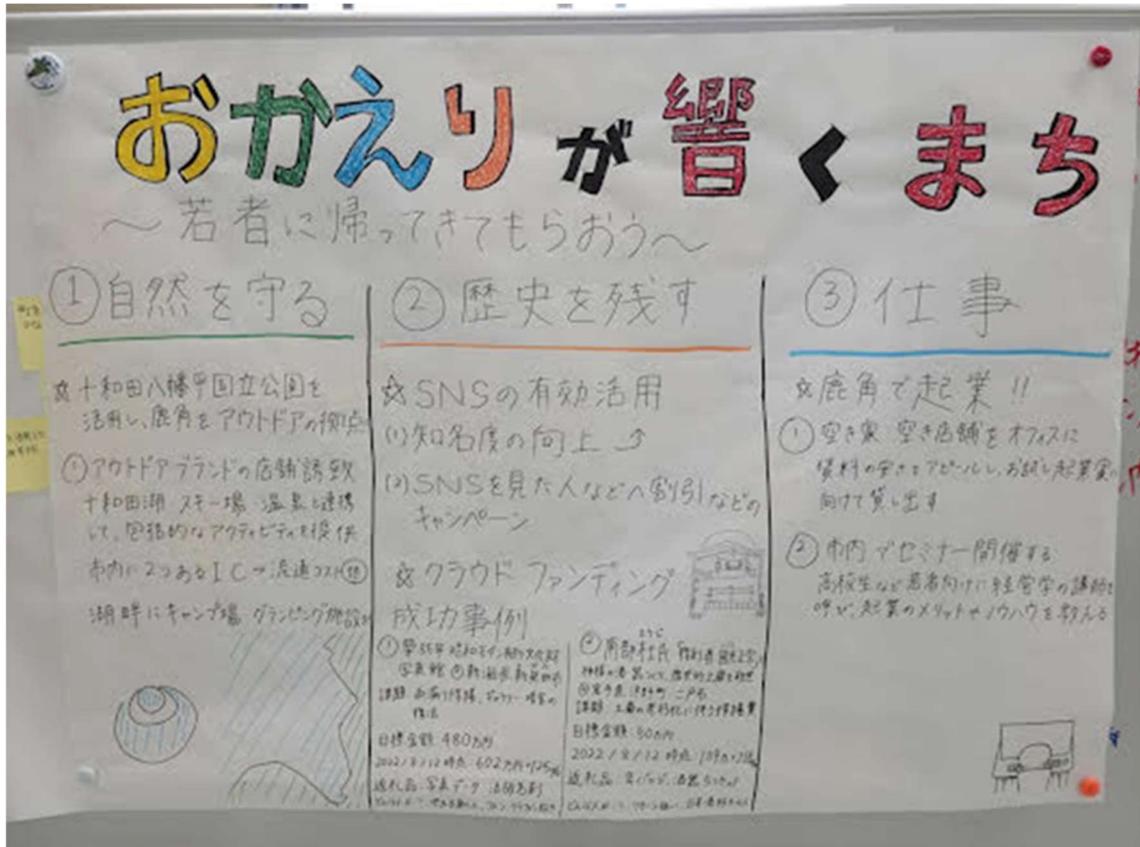
そこで、A 班は「おかえりが響くまち」をテーマに、若者が外で様々なことを吸収し、街に帰ってくることを願い、そのときに鹿角市がどのような姿であったら良いかを考え、改善点や提案として「自然」、「歴史・文化」、「雇用」の3つの分野についてまとめた。

1 つ目は鹿角市の最大の魅力である自然を守ることである。鹿角市の特色は、冒頭にも述べたように八幡平、十和田湖、湯瀬溪谷など豊かな自然である。自然は農産物や畜産物の生産に不可欠であるとともに、人間の心と体の健康を維持するために重要なものである。鹿角の自然の中で育ち、都会に就職や進学した人々がその自然を懐かしみ、戻ろうとしたときに変わらない自然があって欲しいという願いがある。

2 つ目は鹿角の文化や歴史を残していくことである。関善酒店、鹿角市歴史民俗資料館など有形文化財や花輪ばやし、花輪ねふた、大日堂舞楽など無形民俗文化財、大湯環状列石など遺跡だけでなく、多くの昔話が語り継がれている。古くから鉾山町として発展し、多くの人々が居住したことが所以である。

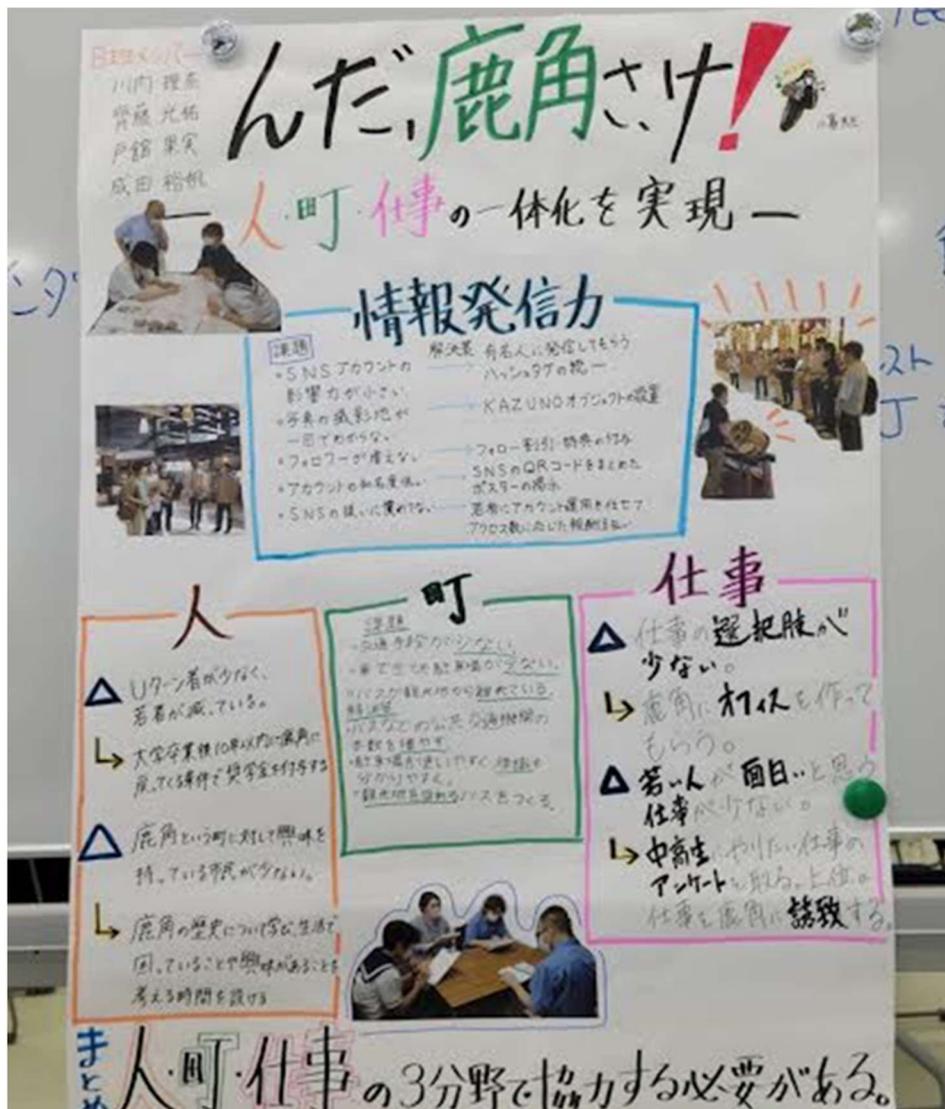
3 つ目は、若者が鹿角に戻ってきた時に雇用があるように、仕事を作ること

ある。既存の農林業、観光に関連したビジネスだけでなく、空き家、空き店舗をオフィスにした起業支援、創業支援セミナーの開催などにより選択肢を広げる。



B班「んだ、鹿角さ、け！一人・町・仕事の一体化を実現ー」

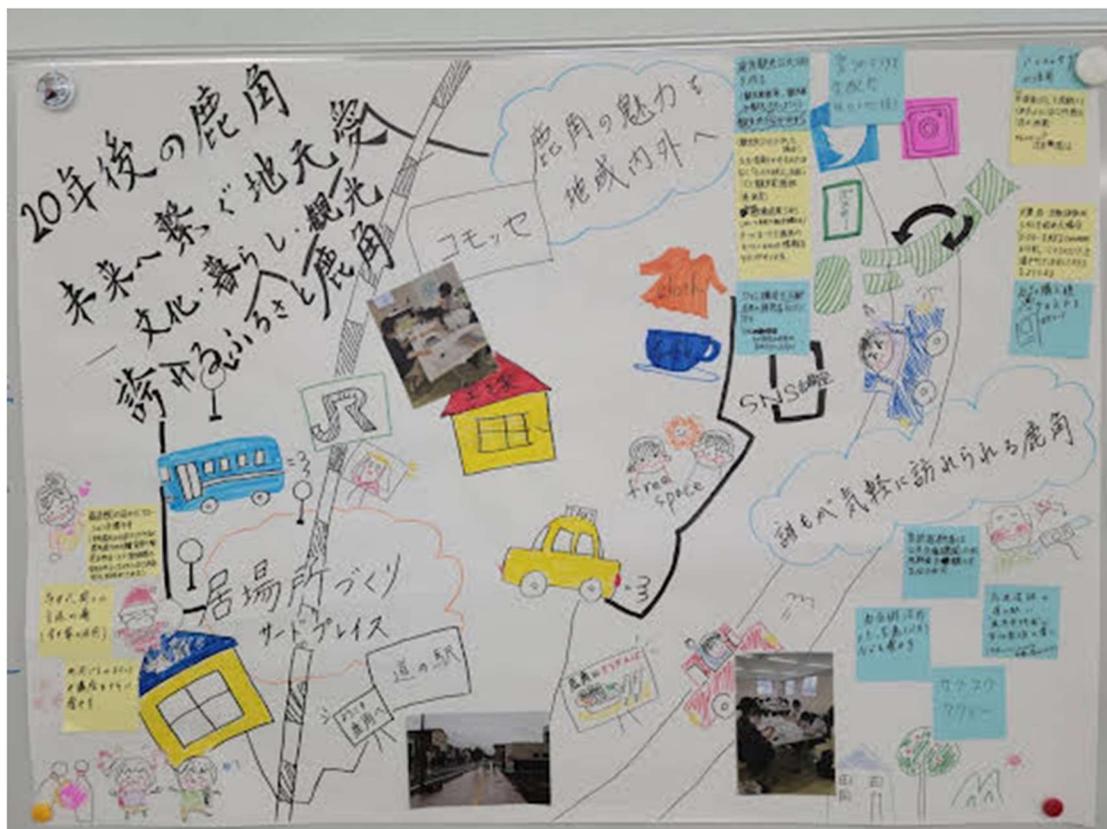
鹿角の魅力に対する情報発信力の弱さに着眼し、人・町・仕事において何が足りないのか考察したものである。Uターン者が少ないこと、その要因の一つが若者が面白いと思う仕事が少ないことである。さらに、交通の利便性が良くなること背景には、地域に関心のある市民が少ないことがあるのではないだろうか。ひと、まち、仕事の問題は、それぞれ単独で生じているのではなく、相互に関連している。したがって、その解決には定住・移住促進、まちづくり、産業振興を連携させる必要がある。その前提として、鹿角市の魅力を内外に発信する必要があり、その手段としてSNSを活用すべきである。



C班 「未来へ繋ぐ地元愛ー文化・暮らし・観光ー誇れるふるさと鹿角」

鹿角市のマップをモチーフにしたポスターで鹿角の魅力をアピールしたものである。

私たちの班では、成果物を作成していく時に、イラストを軸にして3つのテーマ別に作成していこうとなった。成果物の構図、イラスト制作、文字の書き入れは高校生の子が中心となって行い、色塗りや文字のペン入れは全員で行った。3つのテーマについては、前の班でまとめた内容を元に、今、鹿角市に必要なと思うものを班内で投票で決めた。そして、ほかの班のように文章化するのではなく、そのテーマについてはこういった案があるというものをそれぞれ出し、付箋にまとめて貼り付けることで、ひとつひとつを見やすくした。



特に、鹿角市で生まれ育った人だけでなく、「誰もが気軽に訪れられる鹿角」であるために、「鹿角市の魅力を地域内外へ」発信し、サードプレイスのように様々な人のための「居場所づくり」を進める必要性を訴求している。

5 得られた気づき、感想

○今回のプログラムに参加して、鹿角の魅力を再発見することができました。長く地元にいると、地元の魅力が分からなくなってしまう、正直プログラムに参加する前は鹿角に魅力なんてないと思っていました。しかし、外部（大学生）の方を招いて、外部からみた鹿角の魅力を交流を通じて学ぶことで私が気づけなかった鹿角の魅力を知ることができました。普段、地元の企業の方のお話を聞くことができないので、このプログラムに参加して良かったなと思いました。また、都市の離れた方と普段交流することがないので、年上の余裕や礼儀といった自分にはないすごさを感じることで、自分もまだまだだから成長しないとなど思われました。私は市役所に就職希望なので、鹿角の魅力を再発見することができて就職に行かせそうで良かったです。鹿角は食文化や観光にたけえいることは知らなかったし、課題点も知ることができて、今日のプログラムに参加して良かったなと思います。（県立花輪高校3年 齊藤彩乃）

○今回のプログラムに参加して良かったと思うことは、鹿角市の中心市街地について自分の郷里と比較しながら考えることができた点です。このプログラムに参加したきっかけは高校の先生から進路に生かせるのではないかと紹介していただいたことですが、正直不安の気持ちが大きかったです。見ず知らずの大学生、中高生と共に活動すること、自分自身は鹿角市の未来について考えることができるのか。しかし、そんな不安は全く要らず、一週間があつという間で充実した時間でした。活動中での事業者インタビューを通して、鹿角市の方は地元の良さに気づけていなかったり、魅力があるのにも関わらず、その魅力をうまくいかせず発信することができていない。（県立花輪高校2年 工藤栞愛）

○今回のかづの未来アカデミーでは、東京の大学生と一緒に鹿角をこれからどうしていくべきかを考え、少しでも大好きな地元に貢献できたのではないかと思います。また、鹿角の良さを新たに発見することができ、うれしい限りです。

中学3年生という進路を決めていかなければならない立場にいる私ですが、このプログラムを通して、課題の一つとして取り上げられていた「情報発信力」を向上させる職業につきたいと思うきっかけになりました。鹿角をたくさんの人に知ってもらえるようなポスターやインターネットを通じた情報発信力とい

うのは必要不可欠なものだと感じています。発信していくための第一歩を踏み出すためにも今、沢山勉強して大好きな地元をより多くの人に知ってもらうために進路を考えていこうと思います。

一週間という短い時間でしたが沢山の事を学ばせて頂き、本当にありがとうございました。(市立八幡平中学校3年 戸館果実)

○私は未来アカデミーに参加して、鹿角の問題点を知ることができ、その改善点を自分なりに考え案を出すことができました。また、インタビューを通してその人達が考えている鹿角の問題点や改善点、若者にどうしてほしいのかなどを聞いて知ることができました。あらためて自分の地域のすばらしさ、良さに気づくことができ、自分の考え方にプラスすることができました。

私は、今まで自分の地域について考えてきませんでしたでしたが、未来アカデミーを通して自分の地域の現状や未来を考える大切さを知ることができました。これからも自分なりに地域の良さなどを考え、発信できたらいいなと思いました。

(市立八幡平中学校2年 海沼美羽)

○私がこのプログラムに参加したきっかけは、中学校の総合の時間に「十和田アピールプロジェクト」の頭文字をおった通称「TAP」での活動がきっかけです。その活動では食べ物(お弁当)を使って十和田地区や鹿角に貢献しよう。が活動のゴールです。その班では3年生ばかりで1年生の私は先輩達に合わせてばかりで自分の意見が言えず困っていたからこのプログラムに参加しようと思いました。

このプログラムに参加して、鹿角の財政の課題や市民(インタビューした人)から見た課題などが沢山見えてきて楽しかったです。二日間でたくさんの人にインタビューして全員地学職種の人たちが熱心に答えてくださいました。なぜこんなにも熱心に答えてくれるのか考えたとき、皆、鹿角好きだから、大好きな故郷を沢山の人に知ってもらいたいから、色々な質問に答えてくれるんだと思いました。

5日間沢山お世話になった武蔵野大学の学生の皆さん、小暮先生、海沼さんありがとうございました。(市立十和田中学校1年 成田裕帆)

○今回の活動では、インタビューしている中で特に印象に残ったものがありました。それは、人が減っているから商品が売れずお店もどんどん縮小していくのではなく、人が少なくなっている中でどう商売を続けていくかという経営者の方の考え方です。このように、厳しい状況だからそれに甘えて現状のまま衰退していくのではなく、この現状からどんなことが出来るのかと常に考えていくのが大切なんだと今回の活動で感じました。(武蔵野大学政治学部政治学科3年 佐藤昂輝)

○中高生や職員、商店街の人など多くの方が鹿角市を愛しており、人口が減少し街が寂しくなっている現状に問題意識を持ってはいるが解決に向けて行動に移している人は少ないように感じた。行動に移そうと思っても何をしたら良いかわからないこともあると思う。また、1人でできることは限られている。そのため、街をあげて取り組み、街の住民が同じ意識を持って課題解決に取り組んでいくことが大事であると感じました。今回対象としたエリアは鹿角市だけでしたが、同じように人口流出により衰退が見込まれる地域は数多くあります。それぞれの地域に合わせた解決策を考えることは大事であるが時間がかかるため同時に救えるような共通の解決策を考えることも大事であると思いました。(武蔵野大学政治学部政治学科3年 齊藤光祐)

○2日間、話を伺った。これまでずっと鹿角市に居られた方、鹿角市で生まれ育ち、進学で離れたが、戻ってこられた方、生まれも育ちも鹿角市ではないが、鹿角市に注目している方など多くの方々の意見を聞いた。多くの方にお話を伺うことで多様な意見を拝聴できた。もちろん、他の方と意見が180度異なっている声や、商店街の衰退にショックを隠しきれない声などとても切実なものも含まれる。しかし、それらは全て愛のあるものだった。鹿角に対し愛があるからこそ忌憚のない意見であると感じた。それはある種の郷土愛というものなのかもしれない。また、同時に大学生として実のある提案をしなければならないという責任も感じた。成果発表の内容をお話を伺った方々や鹿角市民の方々の厳しい目でご精査頂ければ、このプロジェクトに参加した者としてこれ以上のものはないと思う。(武蔵野大学政治学部政治学科2年 田村康祐)

○私は、この1週間を鹿角市にみんなと住んでシャワーが使えないことやトイ

レが流れなかったことなど普段 1 人暮らしをしている時には考えられないことばかり起きてとても刺激的な生活を送ることができました。これからはどんな生活環境でも住めると思います！（武蔵野大学経済学部経済学科 3 年 高橋佳希）

○今回の発展 FS を通して、人とのつながりを改めて実感しました。ここでいう「人とのつながり」とは、目に見えるものもあれば、目に見えないものも含まれます。よく、「コロナによって、人とのつながりが希薄化している」と言われがちです。しかし、それは今まで見えていた繋がりが、見えにくくなってしまっただけで、実際はそうではなかったことを学びました。1 人 1 人が何かしら地域に関わっており、コロナ禍であっても、自分にできることを一生懸命行っていたのです。

私たちが計画通りに動けるよう、事前に準備してくださった鹿角市の職員さん、暑い環境の中で、大学生と同じスケジュールをこなした中高生、そしてなによりも、私たちが温かく受け入れてくださった鹿角市の住民には、感謝しかありません。1 週間という短い時間の中、武蔵野大学の学生ではなく、鹿角市の住民の 1 人として、鹿角市に携ることができて幸せでした。貴重な経験を、本当にありがとうございました。（武蔵野大人間科学部社会福祉学科 3 年 安江里花子）

○呉服店のインタビューで『若い人たちが鹿角に来てくれて嬉しい』と歓迎していただいたり、お昼ご飯を食べに伺った美ふじで「きりたんぽ」をサービスしてもらったりと、鹿角市民の方々の暖かさを身近に感じた事がとても印象に残っています。中高生とは、鹿角の未来を考える活動をする中で、お互い打ち解け合いお昼ご飯を「喫茶店 Queen」で一緒に食べました。良い関係を築くことができ、良い思い出になりました。（武蔵野大学経営学部経営学科 4 年 川内理奈）

○どこに行っても暖かく親切に迎え入れてもらえて、とても居心地の良い街だと感じた。各インタビュー先でどのの方々も、若者は鹿角の外に出て、広い世界を学び、鹿角に還元して欲しいということをおっしゃっていて、街全体が若者を応援するような雰囲気を感じて、今後若者が帰ってきて、力を還元する場があれば良いなと思った。（武蔵野大学経営学部経営学科 3 年 榎本耀）

※補足資料

共同研究の概要

今年度の共同研究により創出したい価値は、「中高生と学生の学びあいにより中心市街地の課題を解決する」ことである。具体的には、①中心市街地の将来像を描くこと、②中高生が住み続けるのが難しいという認識にポジティブな刺激を与えること、③大学教育を身近に感じてもらうことである。

手法としてハイポイントインタビューとバックキャストイングを採用した。ステークホルダーへのインタビューから得られたキーワードから鹿角市の将来像を描き、現在の課題を抽出して、課題解決のアイデアをまとめるという手法である。

まず、前段として学生は鹿角市を始めて訪問するので、鹿角市を知るために8月7日(日)、早朝から十和田八幡平駅伝競走全国大会のボランティアに従事し、午後は政策企画課職員の引率で中心市街地の見学を行った。

学生と中高生が初めて顔を合わせるのは8日(月)である。午前10時、街中オフィスに設置した「武蔵野大学鹿角サテライト推進拠点」に学生、中高生が集まり、鹿角市政策企画課の海沼主査から鹿角市の概要について説明を受けた後、中心市街地問題について講義を行った。午後は、中高生と学生との関係性づくり、インタビュー調査の講義、インタビューチームの編成、問いの作成、インタビュー練習を行い、翌日からのインタビューに備えた。インタビューは、3人1チーム、合計4チームで行うこととし、構成は中学生1人・学生2人の組み合わせが2チーム、高校生1名・学生2名及び中学生1人・高校生1人・学生1人の組み合わせがそれぞれ1チームである。

通常インタビューは問題、課題を聞いて解決策を考える問題解決型であるが、今回はハイポイントインタビューを試みた。中高生、学生が対話を続け、鹿角での素晴らしい経験を聞くことができるような問いを工夫してくれた。

インタビューは、9日(火)、10日(水)の二日間、中心市街地で暮らし、働くステークホルダー20名に実施した。9日は午前中2件、午後1件、10日は午前中2件、午後は2日間のインタビューで得られた情報についてブレインストーミングを行い、できるだけたくさんの鹿角の将来につながるキーワード

を整理した。この作業は、翌日のワークショップ（フューチャーセッション）の準備行為である。

11日（木）は、鹿角市の将来を描くフューチャーセッションを行った。インタビューのチームとは別に中高生と学生をミックスし、4人のコミュニティ（グループ）を3つ（A、B、C）作った。各自が自分なりに整理した将来につながるキーワードを新しいコミュニティのメンバーでもう一度ブレインストーミングし、沢山のキーワードをKJ法により整理し、ドット投票で優先順位をつけ、優先順位の高いキーワードをもとに、そのコミュニティの将来像を文章で表現する作業を行った。ブレインストーミングは、思いついたアイデアを模造紙に直接書き込んだり、ポストイットに書いて貼ったり、またはホワイトボードに書き出したりする方法を採用した。

次に、コミュニティで描いた将来像に対して、現在、どんな課題があるのか、何が足りないのかを抽出するためにワールドカフェを行った。これはコミュニティ4人だけのアイデアだと広がりがないので、他のコミュニティにも参加し、対話することで、アイデアに広がりを持たせることが狙いである。具体的には、15分経過後、各コミュニティで一人のホストを残し、他のメンバーは、別のコミュニティに移動し、そのコミュニティのホストから概略の説明を受けたあと、1回目のセッションと同様に15分間、ワークショップを行った。さらにもう15分間、別のコミュニティでのアイデア出しに参加し、最後に最初の自分のコミュニティに戻り、様々な知識を得た中から、コミュニティのメンバーが共有することのできる課題を選んだ。

課題が決まると、その課題を解決するためのアイデア出しである。まず、ブレインストーミングでたくさんのアイデアを出し、ポストイットや模造紙、ホワイトボードに書き出す。それをKJ法で整理し、優先順位をつける。ドット投票の手法を教授したが、ほとんどのコミュニティは対話により、3つの課題に収れんしていた。

12日（金）は、午前中、昨日得られた将来像、課題、解決のアイデアを改めて見直し、必要な修正等を行い、クイックレポートとして壁新聞を作成した。午後2時から、壁新聞を掲出し、成果発表会を行った。発表会は、佐藤昂輝がMC

を務め、冒頭、武蔵野大学小暮から挨拶、今回のプログラムの趣旨説明を行ったあと、コミュニティ A、B、C の順で発表を行った。発表会には、インタビュー先の方、自治会の方など 44 名に参加していただき、2 名の方から貴重なご意見、ご提案をいただいた。最後に、関市長から講評をいただき、本プログラムを終了した。